報告

中国の辞書の現状とゆくえ

薛 豹

日常の文化生活のなかで、辞書は欠かせないものである。では、現在、中国ではどのような辞書がよく利用されているのか。特に、よく使われている外国語の辞書とはどんなものなのか。また、これから辞書はどのように発展していくのか。本稿では、辞書の現状について、紙辞書や電子辞書、携帯辞書をとりあげ、辞書のゆくえについて、「コーパス」の誕生と応用について紹介したい。

1 中国でよく利用されている辞書

まず、母国語である中国語の辞書から紹介することにしよう。これまで、中国人の一般家庭で常備されている辞書といえば、大抵『現代漢語詞典』（商務印書館、第一版一九七八年、第二版一九八三年、改訂第三版一九九六年ほか）であった。ただし学者の家には、古代の中国語辞書『説文解字』（後漢・許慎編著）や『康熙字典』、近現代の大型辞書『辞源』（商務印書館、合冊本一九三六年、改訂版一―四合冊本一九八八年）や百科事典の『辞海』（中華書局、初版一九三六年、上海辞書出版社、一九七九年版と一九八九年版）、『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社）なども備えられている。しかし一般家庭では、『現代漢語詞典』一冊でほとんどの用が足せる。この辞書は、中国社会科学院語言研究所詞典編集室が編纂し、多くの著名な中国語の学者が編纂に参与したことから、最も権威ある辞書であるといえる。

しかし、いくら権威があるといっても、総人口十数億の国で、ほとんどの人が一種類の中国語辞書しか利用しないというのもいささか寂しい。そこで、二〇〇四年に、『現代漢語規範詞典』が、二一世紀の新しい中国語辞書として外語教学与研究出版社と語文出版社から刊行された。これは中国では画期的な出来事であった。辞書の首席顧問で、著名な言語学者である許嘉璐氏は、前書きで、「『現代漢語規範詞典』の出版は、我が国の辞書出版業界において大きな出来事である」とのべた。呂淑湘氏の前書きによれば、刊行に至るいきさつは次のようである。辞書編纂代表の李行健氏が一九八八年から一九九一年にかけて日本の一橋大学で教鞭を執っている時に、日本では様々な

国語辞典が出版されているのを見て大変な刺激を受け、中国でも『現代漢語詞典』を超えるような二一世紀の新しい中国語辞書を刊行したいと決意し、『現代漢語規範詞典』の編纂作業に踏み切ったのだという。

編纂作業では、まず約百人の中国語学者を組織し、国家語言文字委任会企画の〈八五〉（一九九一～一九九五年）重点プロジェクトとして一一年の年月をかけて原稿を完成させた。そして二〇〇四年に外語教学与研究出版社と語文出版社から刊行した。これによって、中国人には選択肢が一つ増えたといえる。この辞書には、中国人が読み間違えやすい、あるいは書き間違えやすい漢字の後ろに「提示」という項目を設けた。また親字と見出し語に初めて品詞を標示して外国人の利用にも配慮した。そのため読者から高い人気を得ている。

そして従来の『現代漢語詞典』にも、二〇〇五年の第五版では親字と見出し語に品詞が標示された。『現代漢語規範詞典』もまもなく第二版の刊行が予定されている。読者にとって両者の改善は喜ばしいことである。また筆者も、『現代漢語詞典』と『現代漢語規範詞典』の両方を手元において照合して調べるのが楽しみである。

次に、英語の辞書について述べる。中国は英語教育大国である。英語教育は、大都市ではほとんどが小学一年生（あるいは幼稚園）から、中小都市や農村部では小学三年生から始まる。そのため市販されている辞書は、中国語よりも英語のほうが圧倒的に多い。大型の百科事典タイプの英中辞典には、陸谷孫等編纂『英漢大詞典』（上海訳文出版社）や李華駒等編纂『大英漢詞典』（外語教学与研究出版社、一九九二年）がある。前者は、収録語数約二〇万語、上下二冊で刊行され、一九九三年に縮刷版がだされた。後者は、収録語数約一八万語で、規模では前者に及ばないが、イギリス式の音声記号とアメリカ式の音声記号が見出し語の後に併記されている点が前者より優れている。中国では、イギリス式の発音かアメリカ式の発音かにこだわる人が少なくない。

中型の英語辞典として人気が高いのは、オックスフォード英語辞書シリーズとロングマン英語辞書シリーズである。外語教学与研究出版社がロングマン社からライセンスを受けて翻訳製作した『朗文当代高級英語辞典』（英英・英漢双解第四版、二〇〇九年）および『朗文高階英漢双解詞典』（二〇〇六年）と、商務印書館がオックスフォード大学出版社からライセンスを受けて翻訳製作した『牛津高階英漢双解詞典』第六版（第一版一九九七年、第二版二〇〇四年）はその典型である。このほか外語教学与研究出版社がケンブリッジからライセンスを受けて翻訳製作した『剣橋高階英漢双解詞典』（第一版二〇〇八年）や『剣橋中階英漢双解詞典』（第一版二〇〇五年）も英語学習者の間で人気がある。

このほか恵宇等編纂『新世紀漢英大詞典』（外語教学与研究出版社、第一版二〇〇三年）は、収録語数約一四万語で、一般語彙のほか百科語彙や新語も多く収録されている。また見出し語にはすべてピンインと品詞が付されており、外国人の中国

語学習にも役に立つ。見出し語の下には関連する語彙も併記されており、実用的であることが最も重視されている。付録も一九項目あり、豊富である。アルファベット語や中国の歴史年表、民族、行政区画、国家機構、政治協商会議、政党とその機構および人民団体、年中行事と祝日、地名、姓、中国でしか使われない漢字、二十四節気、干支、警察官と軍人の階級のほか、世界各国・地域に関する首都や貨幣、使用言語、主要宗教も記されており、針灸のツボ経絡図や元素周期律表などもある。さらに二〇〇四年には縮刷版も刊行された。

日本語辞書の現状は次のようである。大型の百科事典タイプの日中辞典には、『日漢大辞典』（上海訳文出版社、第一版二〇〇二年）や『新世紀日漢双解大辞典』（外語教学与研究出版社、第一版二〇〇九年）がある。前者は、上海訳文出版社が日本の講談社から版権を買って翻訳したものであり、一八万語収録されている。後者は、外語教学与研究出版社が日本の三省堂から『辞林21』の版権を買い、『新辞林』の新単語約二万語を補充して日中対訳の形で編纂したもので、一七万語収録されている。これには一般語彙のほか、百科語彙や新語も多く収録されている。A4判で三八六頁にも上り、漢字の部首索引や中国語ピンイン索引も巻末に掲載されており、漢字や漢語の読み方を調べるにはとても便利である。

中型の中日辞典としては、日本の旺文社からライセンスを受けて翻訳製作した増補版『外研社日漢双解学習詞典』（外語教学与研究出版社、第二版二〇〇五年）や、増訂版『新日漢辞典』（遼寧人民出版社、二〇〇二年）、日本の小学館『日中辞典』と内容がほぼ同じの『現代日漢大詞典』（商務印書館、一九八七年）がよく利用されている。このほか松岡栄治他編著『外研社三省堂皇冠漢日詞典』（外語教学与研究出版社、第一版二〇〇三年）には六万五千語が収録されている。これは日本の三省堂の『クラウン中日辞典』の復刻版である。『現代漢語詞典』（商務印書館、増補版二〇〇二年）の収録語数より五千語余り多く、新語も多く収録されているため人気が高い。二〇〇五年には三刷がでた。なお松岡栄治先生等はこの辞書を編纂するにあたって、『北京青年報』を内容としたコーパスを利用している。

2　電子辞書と携帯辞書

紙辞書は外国語の勉強には効果的であるが、携帯には不便である。特に、大型の辞書となると、出張や短期留学の場合は持っていくのに骨がおれる。そこで誕生したのが電子辞書である。

二〇〇一年、電子版『康熙字典』（CD-ROM二枚、万方データ電子出版社、書同文デジタル化技術有限会社）が出版された。PC版とオンライン版の二種類がある。電子版は石印版『康熙字典』（同文書局）を底本にしており、四万七千の漢字を収録する。簡体字や繁体字、中国の漢字、日本の漢字、異体字など多種類の関連漢字を検索することができる。

市販されている電子辞書には、文曲星、好易通、快易通、名人、歩歩高、好記星、諾亜舟、外研通、三星、カシオなどのブ

ランドがあり、それぞれのコンテンツには特色がある。

「好記星」の電子辞書には、シリーズの製品がある。「好記星全能王Ⅵ+」はその一つである。この機種はオックスフォードシリーズの『オックスフォード精解英漢双解詞典』など三冊の英語辞書を収録しているだけでなく、小学校から高校までの英語教科書の英単語をすべて収録している。英単語の記憶法も掲載されている。英語教科書の重点や難点、試験問題に頻出する語についての有名な先生による解説録画もある。英語だけではなく、政治や数学、歴史、地理、物理学、化学、生物学など九科目の教科書（各出版社の版本あり）について有名な先生が解説した補習内容や練習問題もあるため、生徒たちの学習に役立つ。

「外研通」は、外語教学与研究出版社（略称：外研社）が開発した電子辞書である。外研社の『高級英漢詞典』と『現代漢英詞典』、二冊の辞典と英会話などを収録している。

香港の技術会社である康明公司は、多言語電子辞書の開発の面で抜きんでている。世界各国の言語の辞典はほとんど開発されており、三か国語対照や五か国語対照の電子辞書などを製作している。また外国語の辞書や会話集ばかりでなく、中国の広東語を取り入れた機種もある。発音機能もあるため外国語や広東語を学ぶにはとても便利である。

カシオ(上海)有限会社が開発した電子辞書は、中国で人気がある。英語を中心にした辞書、日本語を中心にした辞書、それにフランス語を中心にした辞書と法律を中心にした辞書などいくつかの機種がある。内容的には単語を調べるだけでなく、会話や文型が検索でき、英語試験対応についても活用できる。所収の日本語辞書には、岩波書店の『広辞苑』『広辞苑逆引き辞典』、三省堂の『新明解辞典』、くろしお出版の『日本語文型辞典』、『ＮＨＫアクセント辞典』などがあり、中日辞典は『クラウン中日辞典』である。日本語学習者にとってカシオのEV-SP3900、EW-V3800、EW-V3700などの機種は、いずれも日英中の電子辞書として選択できる。またかつてカシオ(上海)有限会社の吉田修作社長に、「いざという時に命が救われる『医学外国語辞典』も電子辞書に入れてほしいですね」と建言したことがあるが、現在、カシオの電子辞書には、中国の図書業界で最高の賞である国家図書賞を受賞した『中山英漢医学詞典』（外研社、二〇〇二年）が収録されている。

ところで、近年、さらに新しいタイプの辞書が出現した。携帯電話に掲載可能な「携帯辞書」である。外語教学与研究出版社と北京百和金碼科学技術有限会社は、携帯電話技術の進歩と3G技術の完備に伴って、携帯電話に搭載できる日中辞典や独中辞典、仏中辞典、伊中辞典などを開発し、販売し始めている。ＴＦカードを携帯電話に挿入してインストールすれば、辞書として利用できるようになっている。将来的には、携帯電話に権威のある外国語の辞書や会話集など実用的な内容が満載され、発音が聞けて、画面が見られる新型製品も夢ではない。これからの辞書には、より一層の内容の豊富さや質の高さ、使用上の便利さ、個性化が求められている。

3　コーパスの誕生と応用

コーパスとは、実際に使用された言語資料の集成である。近年は、特に電子化された言語資料のことをいう。[1]

中国では、一九七九年に北京語言学院（現在の北京語言大学）が対外中国語教育の特徴に基づいて、「現代中国語の語彙統計研究」を研究課題としたコーパスを構築し始めた。そこには一七九篇の文章、一八二万字が収められている。当時の中国としてはかなり大容量のコーパスであった。内容別の収録文字数、総容量に占める割合は、政論が四四万字で二四・四％、科学技術、科学技術者関連が二九万字で一九・八％、オーラル資料が二〇万字で一一・一％、文学作品が八九万字で四八・七％である。『現代漢語頻率詞典』は、この「現代中国語の語彙統計研究」をもとに編纂された辞書である。

世界各国でも、一九九〇年代に入ってコンピュータ時代が到来し、コンピュータを駆使した言語研究と辞書編纂のためのコーパスが次々に完成されている。代表的なものとしては、BROWNのコーパス、COBUILDのコーパス、Longman Copus Network, Cambrige International Copusなど英語のコーパス、北京大学計算語言学研究所の英中対訳コーパス、ハルビン工業大学の英中対訳コーパス、外研社の英中対訳コーパス、そして中国国家語言文字委員会の現代中国語の大型コーパス、『人民日報』の四八年間の新聞の文字とイラストのすべてを収めるコーパス、北京大学の中国語研究用コーパス、北京語言大学の五億字容量のコーパス、清華大学の現代中国語のコーパスとHuaYuコーパス（二千万字ぐらい）、山西大学の中国語新聞コーパス、上海師範大学のコーパス、香港城市大学のLIVAC (Linguistic variety in Chinese communities) コーパス、また北京日本学研究センターの中日対訳コーパス、復旦大学計算機学部の中日英分類のコーパスなどがある。なお『剣橋高階英漢双解詞典』や『剣橋中階英漢双解詞典』は、Cambrige International Copusに基づいて開発された英語辞書の例である。

北京日本学研究センターの中日対訳コーパスの構築は、中国の国家社会科学基金のプロジェクトである。国家社会科学基金のほか、北京大学計算語言学研究所と日本側の日立中央研究所、奈良先端科学技術大学院大学、日本大学、日本国際交流基金の協力を得た。このコーパスの内容は、入力時期によって二つの部分に分けられる。第一期は主に小説などの文学作品、第二期は政治論文や報告書、伝記、随筆、詩歌などが中心である。容量は二千万字に及ぶ。『中日対訳語料庫的研制与応用研究論文集』（中日対訳コーパスの構築と応用研究論文集、外語教学与研究出版社、二〇〇二年）は、北京日本学研究センターを中心に北京外国語大学、山東大学、洛陽外国語学院、北京大学、北京第二外国語学院、上海外国語大学、広東外語外貿大学、対外経済貿易大学、南京師範大学の研究者が参加して、中日対訳コーパスの構築の経緯と利用に関して研究した成果をまとめたものである。

徐一平教授によると、この中日対訳コーパスに基づいた日中

辞典の編纂を計画しているという。また日本語教育と日本語研究をより推進するため、特に日本語の口頭表現の教育を強化できるように日本語会話や映画、テレビドラマなどの音声内容を中心にした中日対訳コーパスも構築したいと語る。

このような膨大な資料の収集とその利用を可能にするコーパスは、これからの辞書の方向をうらなう上で限りない可能性を示すものといえよう。

注

〈1〉 前川喜久雄氏は、コーパスの定義を「言語分析を行うための基礎資料として、書き言葉や話し言葉の資料を組織的に収集し、研究用の情報を付与したうえで電子的に保存したもの」とし、その利用領域として辞書編纂のほか、日本語学や日本語教育、国語教育、心理学・認知科学、自然言語処理などをあげる（「大規模書き言葉コーパスのオンライン試験公開」文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」研究成果報告書、二〇〇七年）。

主要参考文献

Zhiwei Feng 2002 "Evolution and Present Situation of Corpus Research in China," *Journal of Chinese Language and Computing*, Vol. 12.（馮志偉「中国におけるコーパス研究の歴史と現状」）

中国辞書学会学術委員会 2007『中国辞書論集』第七集、外語教学与研究出版社。

徐一平・曹大峰編 2002『中日対訳語料庫的研制与応用研究論文集』（中日対訳コーパスの構築と応用研究論文集）外語教学与研究出版社。